第四章　「消えたコアユニット」

　これが最後だとここで何度思ったことだろう。この建物を見上げ、二度とここには来ないと自分に言い聞かせてから三度目になる。連邦政治局信州支局は相変らずのたたずまいで私を迎え入れてくれる。昔と何かが違うとすれば、今回に限って私は招かれざる客だということだろうか。
　受付で名前を名乗ると、局長への面会希望を女の子に伝えた。もう、あのいつも苦虫を噛んだような無愛想面で私を迎え入れてくれた局長はここにいない。室長クラスですら私のことを覚えている者はもはやいないに違いない。そういう意味では、今までに比べて少しだけ気が楽ではある。ただ、何も後ろ盾もない私が、ここで何ができるのか不安がない訳でもない。ファズアース効果によって昔の力を失っている現在、私が頼れるものは己の知識だけなのだから。
　断られることはないにしても、たぶん出直すことになるだろうと覚悟を決めていたのだが、受付嬢の口から出た言葉は、「お待たせしました。局長室へご案内します。」だった。
　幸いにも局長は会ってくれる気らしい。ビジター用の通行証を受け取り、案内されるままに局長室までの通路を歩いていく。こんなにスムーズに物事が進むことも珍しい。通常ならアポイントを持たない一般人がいきなり局長に面会を求めれば、間違いなく一日は待たされ、その間に情報部がその人物を調査するに違いない。ということは、グレンがお節介をしたということだろうな。
　先に歩いていた案内の足が不意に止まり、私を確認するかの如く振り返った。安心したかのような仕草を見せて、無言でまた先に進む。局長室は昔と変わりなく同じ場所にあった。軽くノックをしてドアを開けると、こちらに背を向けて座っている人物がそこにいた。
「局長、お連れしました。」
　私をここまで案内してくれた女性はもう一度確認するように私の顔を見つめると、黙って会釈をすると引き返していった。
「突然の訪問で申し訳ありません。どうしてもご協力いただきたいことがあって参りました。」
　返事をする気配もなければ、こちらに振り返る素振りもない。一瞬、相手の反応を見ようと話しを切ったが、そのまま続けることにした。
「キャティの衛星上にマックスという悪魔が復活しようしています。私は情報部のグレン大佐からの依頼を受け、データが存在しないデータベースの製作を請け負いました。」
「それが真実であると、君はどうやって証明するつもりなのかね？」
　微動だにせず、こちらに背を向けたままそう問い掛けてくる。その声に聞き覚えはなかったものの、所々に不思議なアクセントがあり、それがどこか懐かしさを感じさせていた。
「証明できるものは何もありません。」
「では、協力することは難しいだろう。そうは思わないか？」
　至極もっともな台詞を言いながら、ゆっくりとこちらに振り返る。話し方に懐かしさを感じながらも、残念ながらその顔に見覚えはまったくない。
「もし、君の言うことが本当だとして、なぜ君はそれをキャットテイルではなく、わざわざこの信州支局に言いに来たのかね？」
「その理由なら簡単です。東京支局の地下にあるパルサシステムが必要だからです。」
　パルサシステムとは *POWLA* システムの試作段階でのコードネームで、今となってはこの名前自体を知っている者もほとんどいないだろう。もちろん、この後に返ってくる台詞もそうだと思っていた。

「なるほど、そういう手があるのか。さすがグレンが頼りにする訳だ。」
「は？」
　まさかこの短い説明だけで納得できる者が、今の連邦政治局にいるとは思わなかった。例えパルサシステムのことを知っていたにしても、一笑に付されるのが落ちだと考えていたのだが。
「その顔つきでは私が誰なのか覚えていないようだな。」
　そう言われて反射的に局長の顔を見てしまう。生憎だがやはりこの顔に見覚えはない。
「この程度のことで迷うということは、能力を失った噂は本当だったのか。まぁ、私のことは宿題にしておくとして、東京支局への立ち入りを許可しよう。ただし、一つだけ条件を付けさせてもらう。」
　やはり、ただじゃ済まないと覚悟をしていたが、とりあえず東京支局への立ち入りを拒否されなかっただけでも助かった。グレンには何も言わずにここへ来たつもりだったが、どうやら考えていることは同じだったようだ。
「君がここにいる間だけで構わないので、科学部希望の新人を一人面倒を見てやって欲しい。」
「そんなことでいいのですか？」
「歴代の連邦委員長の中でも部下の面倒見の良さでは一番との評価は、未だに支局長会議でも語りぐさだ。その本人が目の前にいるんだ。試さずにはいられまい？」
　いったいどういう理由なんだか・・・。それにしても、私の経歴はともかく、能力についてまで正確に知っているとなると、ここでの行動も慎重にした方がよさそうだな。
「期待を裏切らなければいいですが。」
「君は今まで一度たりとも裏切ったことはなかったさ。たぶん、これからもずっとね。」
　そう言って笑う姿に何かのイメージが重なる。こんなシーンを以前にも見たような気がするが、それが何なのか思い出せない。
「ちょっと待ってくれ。もうすぐパートナーがやってくる筈だ。」
　少なくともベルギーで知り合ったのであれば、すべてを知られている理由も分からなくないが、それでパルサシステムを知っているとなるとかなり限定した範囲になってくる。さらに私の能力のことまで知っているとなると、もはや見当もつかなくなってくる。
「失礼しまーす。なんか用だって聞いたんすけどぉ。」
　年齢は二十歳前後か、髪型はボサボサ、口のきき方はもう少し何とかしたほうがよさそうな。はっきり言えば、よくこれで入局できたものだと感心するしかないような青年が部屋に入ってきた。
「紹介しよう。彼はマサキ局員だ。今年、信州支局に配属されたばかりの新人だが、あとのプロフィールは本人から直接聞いてくれ。こっちはたった今から科学部に配属されることになったワキだ。身分は臨時局員でいいだろう。これから二人で情報部からの依頼を受けてもらう。詳細はワキに説明してあるので、あとは二人で相談して進めて欲しい。」
　局長は引き出しからIDカードを取り出すと、私の方に差し出した。既に出来ていたということは、最初からこうするつもりだったということか。何を企んでいるかは知らないが、私はやるべきことをするだけだ。
「ということなので、よろしくお願いします。」
「はぁ、よろしく～。」
　こんな調子で大丈夫なのか不安はあるな。
「どうせ、そんな長い期間にはなるまい、ここにいる間は無人になっている情報部の部屋を使うといい。」
「ありがとうございます。」

　私は軽く頭を下げて局長室をあとにした。マサキという青年も私に続いてくる。
「という訳で暫く一緒に仕事をすることになるのでよろしく。」
「はぁ、よろしくッス。」
　なんかとっつきにくいタイプかもしれない。まぁ、それでも今は貴重なパートナーだ。ここにいる間にそれなりにしてやらないといけないな。
「マサキくんは、ここで何をしたいんだい？」
「自分は面倒なことは嫌いッス。だから、あっちこっちに行かされる仕事はしたくないッスね。」
「そうか、今回行くのは一ヶ所だけだ。」
「どこッスか？」
「東京だよ。そこでデータの無いデータベースを作るんだ。」
　一瞬だが彼の表情に変化が見える。すぐに元に戻ってしまったが、果たして反応したのが東京に対してなのか、データベースに対してなのかまでは読み取れなかった。まぁ、おいおい探ってみることにするか。
「君は科学部希望だとか。何かやりたいことがあるのか？」
「会いたい人がいるんです。」
　何だろうか、不意に頭の中に昔の光景がフラッシュバックする。あれはまだ私がこの連邦政治局に入ったばかりの頃だ。
「誰に会いたいんだ？」
「親父を殺した人物です。そいつは、当時東京支局の科学部にいたという事までは分かっています。」
「だから科学部を希望しているのか？」
「俺は親父が大嫌いでした。親父が作ったパルサシステムも・・・。」
　再び頭の中に昔の光景がフラッシュバックする。あれはパルサシステムの試験稼働を初めて行った日のことだ。その日はさほど広くもない科学部の開発ルームにかなりの人数が入っていた。そのほとんどがベルギーのお偉いさんだという事以外に覚えている事はない。とにかく、全世界でこのパルサシステムを注目しているんだと初めて実感した日だったことだけが妙に記憶に残っている。
　実験自体は成功だったもののここで新たな課題も見つかり、結果としてパルサシステムはその日を最後に役目を終えた。既に水面下では用意されていたのだろうが、入れ代わりに *POWLA* システムが実用段階に入る事が発表されたのだ。私はその日から *POWLA* ステムの担当を命じられ、あの悲劇が起こるまでの数か月を東京支局の実験室で過ごした。
「君のお父さんは東京で亡くなったのか？」
「さぁ、分かりません。ただ、母はパルサシステムを憎んでいました。俺は親父が創ったパルサシステムをもう一度甦らせたいと考えた。連邦政治局に入ればそのチャンスがあると思った。科学部にいればいつかそこに行けると信じていた。俺はパルサシステムのコアユニットを手に入れる。」
　マサキくんの目は真っすぐに私を見ていた。そこにはついさっきまでのいい加減さが消えていた。
　あの局長はこの事を知っていて彼を私と組ませたのだろうか？もし、これが本当に面倒見の良さだけで仕組まれたことなら、マサキくんにとってはこの上ない不幸としか言いようがない。
「残念だが、パルサシステムのコアユニットを手に入れることは出来ないよ。」
「なぜ？」
　彼の力強い瞳が少し揺れるのが見て取れる。
「君がもし正しくパルサシステムを理解していれば、なぜコアユニットが手に入らないのか分かる筈だ。東

京には明日行くことにしよう。今日はゆっくり休んでくれ。」
　彼は何かを言おうとして諦めたらしい。何も言わずに部屋を出ていった。

第四章　「消えたコアユニット」

H20.29.JUL